＜今をとらえる＞

二言三言

徳永昌弘

大学院入学から数えて、そろそろ 15 年になります。研究テーマはソ連・ロシアの地域開発論で、歴史的に日本とも関わりの深いシベリアをフィールドにしています。学部生の時に宮本憲一氏の『環境経済学』(岩波書店、1989 年)を手にしたことがきっかけで、当初は公害・環境問題に関する経済理論の展開に興味があり、同書で引用されていた文献を探しては読んでいた記憶があります。経済学研究科とは別の研究科で開講されていた環境経済論の授業に参加し、経済学の流派を問わず、指定された相当量の文献を毎週読み込むという経験もしました(いわゆる米国流の大学院授業)。

それがなぜロシア研究になったのか。今となっては自分でもはっきりと覚えていませんが、いくつかの要因が重なり合った末のことだと思います。まず、社会主義国の公害・環境問題の実証研究が日本では少なかったことがありました。例えば、宮本氏の上記の本は、社会主義国の実情にわずか数ページを割いているだけです。そして、内情に詳しい現地の研究者や NGO 関係者とコンタクトが取れたこと、第二外国語としてロシア語を多少は理解できたこと、視察旅行に誘われてロシアに短期滞在した経験があること、とにかく行ってみようと単身で乗り込んだシベリアの地で予想外の成果が得られたことなど、流れに身を任せているうちに公害・環境問題を切り口にしてソ連・ロシアの地域開発を批判的に検証するという修士論文に行き着きました。その後は基本的に同じ研究テーマを据えながら、新しい資料(機密解除されたソ連時代の公文書・議事録・統計類)を用いたり、分析の対象を現代にまで広げたりと、手探りの状態で進みながら、そろそろ決着をつけたいと考えているところです。

ところで、これまでの経験から研究上の教訓を自分なりに引き出してみると、意見を異にする人も多いと思いますが、以下のようになります。まず、身内のゼミや研究会での議論だけでなく、外部の研究者と上手に「喧嘩する」(議論を交わすという意味です、念のため)ことの大切さです。研究内容や手法を客観的に批判したり、研究上の情報を交換したりという話だけでなく、「井の中の蛙」は自分の物差しでしか判断できず、最悪の場合、読まず分からず受け付けずとなり、「裸の王様」に近い状態になっていくような気がします。そうした実例をこれまで少なからずみてきました。純粋に研究内容だけで判断される場というのは意外に少なく、そうした機会を自分で作り出すことも必要かもしれません。

この点と関連して、次にいわゆる査読誌をどのように活用するかという点です。確かに査読誌には多くの問題点があります。日本の社会科学系の学術誌でよくみられますが、査読者が掲載の可否を決めるようなやり方は、その点を含め、編集者が大きな権限と責任を持つ欧米の査読誌とは似て非なるものです。投稿者が自分に近い立場の人間の場合、欧米ではルールとして査読を断りますが、日本では投稿者の「身内」で査読者を固めたり、逆にリジェクト(掲載不可)しか付けない査読者に何度も依頼したりすることが珍しくありません。それでも、論文に対する他者の見解を文面で確実に手にするチャンスは、おそらく査読誌への投稿を除いてはなく、研究内容を冷静に見直し、自分の物差しが狂ってないかどうかを確認できる良い機会かと思います。あくまで個人的な話ですが、入れ込んで書いたものよりも、冷めた感じで淡々と書いたものの方が評判良かったりします。

最後に、自分なりに築いてきた人脈は時間が経つほど重宝すると思います。学会の懇親会の場などで名刺交換するばかりが人脈作りではなく、たまたま同じゼミや研究室に居合わせた院生同士のつながりも立派な人脈です。私の場合、今でも内容を良く覚えているのは、大学院の正規ゼミよりも、院生が中心になって開いた自主ゼミや勉強会の方です。この頃は気軽にギブアンドテイクの関係を築きやすいので(年齢を重ねてくると、これが貸し借りの関係になり、しんどくなります)、後々まで長続きするのではないでしょうか。馴れ合いではなく、「緩やかな紐帯」とでも表現できるネットワークこそが大切なような気がします。

(関西大学商学部)